夜明けの鐘

山本周一

超高齢社会。この現象が日本に重く押し寄せる。第二次ベビーブーム世代の退職だ。二〇二〇年には三〇％弱の人々が高齢者となる予測だ（注　参考資料）。また、女性の社会進出前後から始まった晩婚化に伴う少子化。これらを問題解決するのは一筋縄ではいかない。しかし、私はこの世界一早い超高齢社会に一筋の希望を抱いている。

まず、高齢者は知的財産であるということだ。戦争を生き抜き、関東大震災、阪神淡路、東日本大震災を生き抜いてきた精神力には頭が下がる。中には全てを失った中で工夫しながら生活してきた方もいるだろう。一方、高齢者といえば認知症と医療福祉現場のマンパワー不足が懸念されているが、認知症には精神科のリスパダールという精神安定剤がとても効果があると臨床で確認されている。

次に、晩婚化と少子化についてだが、少し偏見を抱かせるかもしれないが、婦人科の医師に次のように言ってもらってはどうだろうか？「三五歳以上の女性は受精しても高齢出産の為障碍者や不妊のリスクが高いので、二〇代に結婚するように」と。さらには家族だけでなくメディアも促してはどうだろうか？　教育の一環として言って良いと私は考える。そもそも男性と女性の役割は違う。ある意味役割分担すらある。また、ベストパートナーになるためにという本には次のようにも書かれている。「すべての面において男女は完璧にお互いの欠けている部分を補え合える特性の違いがある」とある。少子化の対策はあくまで出産にある。認可保育園の設立という観点だけでは対策にならない。

それでは次に、共働きをしなければ育児が出来ない現状と、その構造を見てみよう。まず、高度成長期だが、この時代は三種の神器の様に新しく発明され、輸出にも繋がる商品が開発された時代でもある。一方現代はというと、日本が発明していると普段の生活から感じられるものはあまり無いと一般の人は感じていないだろうか？　企業が怠慢しているわけではないが、何かを新しくするというだけでなく、既存には無いものの

発明が必要ではないだろうか?子どもたちの為にも、スポーツ協会には厳しいが新たなスポーツの開発も試みられても良いと考える。次に視点を変えたビジネスの例を述べる。

エルメスといえばスカーフのカレで有名だが、あれを用いて、日本でもイスラムのファッション、つまり日頃帽子ではなくスカーフを頭に巻くことを取り入れることはできる。また、カレを腰に巻けば着物とスカートの結合のような物も作れる。シャネルもスーツを作る時、当時の女性服では乗馬が出来ないことから、男性服のアイディアを借りて女性用スーツを開発した。

そこで、革新的にどうやって少子社会で全ての人がある程度の幸福を得られるかについて述べる。最優先すると良いと考えられるのは若者の雇用だ。三五歳以下の求人が応募してきたらまず採用というくらい、採用する姿勢が必要だと思う。採用される側も、やっとであれ採用されれば嬉しく思うだろう。これについては、ようやく中小企業に大学生が目を付け始めたと報道がある。また、引きこもりやニートに対するイメージの改善も必要だ。彼らのようなもしかしたら学歴や職歴が少ない人でも出来る仕事を作らなければならない。高齢者には退職してボランティアとして働いてもらうことで、若者が年金の蓄積を検討するという方針を打ち出すことが必要だ。そしてここからは具体的な企業の経理に関することだが、何も高給を社員に出す必要は無いと思う。そういったものは今でもされているだろうが、固定給ではなく賞与で与えるべきではないだろうか。賞与も、仕事の成果によって一人ひとり違っている例があっても良いのではないか?

どうだろう、ここまでくると少し超高齢社会に光が見えて来ないだろうか?知的財産としての高齢者、認知症に合った処方、晩婚化の風潮の変革、積極的な出産。そして企業内で改めて検討してはどうかと思う事柄、所謂中小企業の人材獲得と引きこもりやニートも含んだ若年者雇用の促進。そして給与の仕組み。私一人だろうか?超高齢社会を打開し、世界に世界一速く超高齢社会を乗り越える夜明けの鐘を鳴らせる国が日本だと思っているのは。

希望、夢、憧れ、若い時はそういった内容の言葉に惹かれる。大人になるとさらに、子どもたちの笑顔を護ることに殊更楽しみと生きがいを感じるものだ。ここで、非正規社員だからといって結婚に対して躊躇していてはいけない。東京大学の有田玄研究者が書いた「希望学」という本には、収入が低くても恋愛や結婚に対しては前向きな姿勢が多いとある。

働く世代が健康を管理してくれれば、必ず大変だろうが乗り越えられる。そして、

その頃にはお年寄りの中には講演活動をしたり、小学校に赴いたり、多彩な活躍をしてくださる方々が出られることを願っている。

知的財産から生き抜く知恵を受け継ぐのは今しかない。今もなお変わらずに孤独死の問題が取り上げられるからこそ、地域全体でお年寄りの傍にいるべきだと思う。そして、人の人格は死ぬ時に現れると聞いたことが何度もある。その時、その方々がにこやかに最期を迎えられるように、日本は今変わるべきではないだろうか。

参考資料

玄田有史編著『希望学』中公新書ラクレ、二〇〇六年

ジョン、グレイ著『ベストパートナーになるために』、株式会社三笠書房、一九九三年

山口昌子『シャネルの真実』、新潮社、二〇〇八年

http://kokudokeikaku.go.jp/share/doc_pdf/3161.pdf